

法眼

曹洞宗宗典・経典翻訳事業の意味と歴史

奈良康明

曹洞宗宗典・経典翻訳事業編集委員会会長

I.

禅とは生きる道である。人間を含む万物存在を否応なしに包み込み、生かしている真実、～正法とも仏ともいっていい～に心が開け、随順し、その真実を生活の上にはたらかせるところに禅の生き方がある。哲学でもなければ論理でもない。いや、鈴木大拙の言葉を借りるなら、「禅は哲学ではない。しかし、禅の中に哲学はある」と言う方が判りよいかも知れない。

同時に禅は文化でもある。特に社会に定着し、教団としての発展をみると、そこは民族の心の深奥にあるエトスや生活習慣、伝統的な思考の枠組み、つまり文化と不可分に結びついている。アメリカに禅が移入され、定着するとき、日本と全く同じ文化が定着することはない。必ずや文化的変容が起こるし、それがあって始めて土着することができる。

問題は変わっていい部分と良くない部分があるので、正法の受用と実践は変わってはいけないものであろう。変わったら禅ではなくなる。

曾て北米やヨーロッパの禅センターの指導者の方々に集まって頂いて、第一回の共同摂心を行ったことがある。その時に私はこういう譬喩を述べた。禅文化の伝承は卵である。その中で最も重要なのは黄味であり、それが正法である。黄味は黄味だけでは存在し得ないので、どうしてもそれを保護する白身があり、カラザがあり、殻がなければならない。卵を新しい場所にもって行くとき、それが大事だからと言って黄味だけを持っていくことは出来ない。それを支える白身や殻と共に運ばなければならない。同様に正法を新しい文化土壌に移入するとき、正法を支え、保持する種々の道具立てがある。そして黄味は変わってはならないが、文化的に伝承していく道具立ての部分は変容していい。

何が正法で、何がそれを支える文化的道具立てか、の弁別は人によっても異なるが、私は、禅の伝承に最重要なものは坐禅と、禅の基本的世界観と、当初はそれを形にあらわす修行儀礼だと思っている。曹洞宗なりに伝承してきた仏典や宗典、そして行持がそれにあたる。別の言い方をすれば、曹洞宗なりに正法を支えてきたのが宗門で多用する仏典であり、そして宗典なのである。

しかし、北米の状況を見ると、仏典、宗典は各センター

で別個に英訳されてきた。日本では考えられない状況であって、『正法眼蔵』であれ、『傳光録』であれ、『般若心経』であれ、原典としては一つである。ちょうど一般なバイブルが人により宗教的理解を異にすることがあるように、禅の指導者の間で原典の宗乘的解釈は異なることがあり得るが、原典は同じである。疑問があっても常にそこに戻っていくことができる。

しかし、複数の英訳が用いられているということは、複数の原典と言うことである。とくに『正法眼蔵』や『傳光録』は宗教的境涯を吐露したテキストである。解釈が難しいし、且つ、絶対に必要な訳注や補注のない英訳が少なくなかった。原意を正しくするには十分とは言えず、学問的に正確な翻訳が望まれていた。

仏典や読誦用の偈文がそれぞれのセンターで異なるのも、共同で行う摂心や儀礼を行いにくくしている。日本では曹洞宗の人間ならどこから来た人でも同じ仏典や偈文を同じ方式で読む。儀礼を共にし、連帯感を強め、それはさらには正法実践の共通の基盤を構築するのに役立っている。

こうしたことから、各センターや曹洞宗開教寺院から、宗門で統一した権威ある仏典、宗典、偈文の英訳を望む声が高まってきた。日本国内でもその必要性は主張されていて、特にその声は『修証義』公布100周年記念(1991年)以来の要望だった。同時に多くの禅センターおよび海外寺院の開教師たちの間からも平成元年以降、事業の促進方が強く要望された。

II.

こうした経緯のなかから、1994年(平成6年)海外開教振興協議会で具体策が協議され、翌1995年(平成7年)には曹洞宗宗典・経典翻訳企画会が開かれ、そしてこれは1996年(平成8年)5月27日に正式の翻訳委員会が発足したのである。

事業遂行の中心となるのは「編集委員会」で、正式メンバーは次の通りである。会長(日本の学者で英語に堪能なもの・不肖私がつとめている)、事務局長、編集長2名(禅の学者で英語を母語とし、あるいは母国語に近い能力をもち、且つ日本語を学習していて、翻訳、出版等に詳しいもの。スタンフォード大学のカール・ピュルフェルト教授、サラローレンス大学のグリフィス・フォーク教授)、日本の宗学者2名(翻訳上の問題について相談を受けアドバイスする・松田文雄駒澤大学総長)、米国の学者2名(仏教学、曹洞禅専門家。編集長を含む:上記2名の編集長およびエール大学のスタンレー・ワインシュタイン教授)、アメリカ曹洞禅の指導者2名

(サンフランシスコ禅センター元堂頭の天真アンダーソン師、北アメリカ開教センター所長の奥村正博師)。

本編集委員会は翻訳、編集の一切の業務を行う。翻訳基準の設定、各年度のテキストの選定、翻訳委託、翻訳についての指導、完全な英訳の完成と編集委員会への提出、出版の手続き等である。

翻訳するテキストは曹洞宗が日常に多用する宗典、仏典、清規類、そして読誦偈文類等である。そのため大まかに2ないし3の翻訳グループが2名の編集長を中心に構成された。各グループのテキストおよび今日までの進捗状況は次の通りである。

(1)『正法眼蔵』グループ。ピュルフェルト教授が編集長で、アメリカの学者たちの協力も得ながら、すでに次の各巻の翻訳を完了した。大悟、坐禅儀、坐禅箴、画餅、山水経、諸悪莫作、神通、諸法実相、仏道、他心通で、さらに数章の翻訳が進行中である。

後述する『傳光録』も同様だが、『正法眼蔵』の従来の翻訳は達意的な英訳がかなりあり、註釈も少ないので、翻訳(英語)の正しい意味さえとるのに十分でないものがある、こうしたことを踏まえて、本委員会の翻訳は学問的な正確さを心がけている。そのため、CDで公開するものには、原本、ローマ字表記、英訳、脚注、補注、グロッサリーを付する。ただし、研究、参究用に印刷物としての出版、さらには一般大衆用の解説、英訳、補注のみの出版をも最終的には考えている。

(2)『傳光録』グループ。フォーク教授が編集長で、最終的には『傳光録』を英訳するが、当面、『曹洞宗行持規範』および『永平清規』『瑩山清規』などの僧堂の清規を翻訳することになっている。すでに「典座教訓」の訳は完成し、『行持規範』も間もなく完成の予定である。清規類は各禅センターの日常の生活に重要な意味と必要性を持っており、そのため英訳する順番を優先させることにしたものである。

以上の2グループのほか、やはりグリフィス編集長がまとめ役となり、天真アンダーソン師、奥村正博師が中心になって訳業を進めた『曹洞宗日課勤行聖典』グループがある。これはすでに完成し、今秋中に出版される予定である。ここには普廻向、開経偈、懺悔文、入浴之偈などから舍利礼文、『般若心経』等の英訳が含まれていて、これも禅センターの日常の修行生活に必須のものである。

本英訳は10ヵ所個の禅センターから代表が集まって作成された。学問的正確さ、唱え易さ、英語としての表現の適切さ等を皆が討議し、時には白熱した議論のすえにまとめられたものである。

さらに、本委員会の仕事をささえるコンピューター関係の仕事がある。これは仏典のデータベース化で著名な花園大学のウルス・アップ教授が委員会のメンバーとして参加している。編集助手の松永寛道師とともに、諸種プログラミング、テキストの入力、編集者と翻訳者の電子データの交換、統一した専門用語辞典の作成等のための作業、等に大きな貢献をしている。

本委員会は、予定より幾分の遅れはあるが、着実な進捗を見せている。曹洞禅の海外発展のために、このプロジェクトは計り知れないほどの重要な意味を持っている。最終的な翻訳完成の日の一日も早からんことを願うとともに、私たちは出来るだけの力を払うつもりでいるので、諸種の面での協力、激励を頂きたい。

道元禅師の著作の翻訳

奥村正博 北アメリカ開教センター所長

1972年に、私が京都の安泰寺で修行をはじめたとき、師匠の内山老師から、英語の勉強をするようにとすすめられました。多くの西洋人が参禅に来ていたからです。道元禅師が教えられた仏法を英語で語り、坐禅指導が出来る人がこれからは是非必要だと言われました。

英語学校で英語を勉強するようになってから、道元禅師や曹洞宗の教えについての本を英語で読みたいと思って探しはじめました。見つけることが出来たのは、駒澤大学の教授であった、増永靈鳳先生の、「正法眼蔵随聞記」の英訳ともう一つのごく薄い本で、「現成公案」や「生死」の巻など短い巻の翻訳が入っているものの2冊だけしかありませんでした。他の曹洞禅に関する英語の本で入手可能だったものと言えば、発行されたばかりの鈴木俊隆老師の「Zen Mind, Beginner's Mind」が唯一のものでした。

1975年に私はアメリカに来てマサチューセッツ州の小さな坐禅の道場に、5年間居りました。そのころ、一人のアメリカ人参禅者が、道元禅師の「普勧坐禅儀」の英訳だと言って小冊子を見せてくれました。もう、誰の訳だったのかは覚えていませんが、それを読んで、道元禅師はこんなことは言っていないと思いました。それで、自分の訳を作り、毎週日曜に行っていた一日摂心のディスカッションの時間のテキストに使いました。それが私が道元禅師の著作の英訳をはじめたきっかけでした。それから、ずっと道元禅師と内山老師の著作の英訳に従事しております。私の場合は、アメリカの人々と坐禅を共にし、道元禅師の教えを参究するために、必要に迫られてテキスト作りとして翻訳をはじめたのです。

ともあれ、禅ブームの真っ最中で、多くの禅センターが創立されつつあった25年前のアメリカでは道元禅師の著作の翻訳はほとんど手に入れることは出来なかったのです。そのような状況の中で、道元禅師の仏法と坐禅修行を伝えるために努力をされた先達の方々に深い敬意を表さずにはおれません。

それから四半世紀が過ぎ、21世紀のはじめとなった現在、多くの道元禅師の著作の英訳や、曹洞禅についての英語で書

かれた出版物が入手可能です。誠に有り難いことだと存じます。しかし、道元禅師の教えと、800年の歴史がある曹洞禅を深く勉強するには、今あるだけで十分だというわけにはいきません。ことに道元禅師の著作、中でも「正法眼蔵」は日本人にとっても難解な書ですので、翻訳者の理解力によって訳がかなり違ってしまいます。個性のある個人訳は勿論それなりに意味がありますが、専門の学者による、それらのスタンダードとなることの出来る権威のある翻訳が待ち望まれていました。その意味で曹洞宗宗務庁の宗典經典翻訳事業がはじめられたことに甚深の敬意を表します。翻訳委員会の会長であられる、奈良康明先生にこの事業の歴史と意味を書いていただくことが出来ましたことを有り難く存じます。

この号の「法眼」誌上に、カール・ビュルフェルト先生の「正法眼蔵山水経」の英語訳を掲載出来ますことを大変光栄に存じます。この英訳は、曹洞宗宗典經典翻訳事業の一環として訳されたものです。これから、正法眼蔵全巻の訳が完成し、出版されるまで、事業の成果を少しずつ公表する場として、毎号一巻ずつ掲載させていただきます。

それを機会に、今回は特集として、今アメリカで道元禅師の著作の翻訳に携わっている3人の方々にその翻訳の仕事について書いていただきました。

カール・ビュルフェルト先生は、翻訳事業の編集長の一人で、スタンフォード大学の教授です。70年代から道元禅師の研究をされているこの分野の草分け的存在です。「普勧坐禅儀」などの道元禅師の坐禅についての著作の研究書、「Dogen's Manual of Seated Meditation」は多くの参禅者の間に知られています。今回の寄稿文で、教授は、若いころ、タサハラで、鈴木俊隆老師の助けを受けながら「正法眼蔵山水経」を訳された経験について書かれています。

棚橋一晃氏は、芸術家であり、著作家であり、翻訳家でもあります。サンフランシスコ禅センターの何人かのお坊さんと共同作業で道元禅師の著作を翻訳されています。その成果は、「Moon in the Dew Drop」、「Enlightenment Unfold」の2冊の本として出版されています。道元禅師の著作の英訳としては、最も親しまれているもの一つです。棚橋氏は、道元禅師をポスト実存主義者と捉え、その人間の行為に対する積極的な信頼に感動を受けたと言われます。

太源・ダン・レイトン師はサンフランシスコ禅センターのお坊さんの一人です。棚橋氏と共同で道元禅師の著作のいくつかを訳されました。「宏智禅師広録」の部分訳を、「Cultivating the Empty Field」として出版されています。また、私との共訳で、「Dogen's Standard for Zen Community (永平清規)」、「Wholehearted Way (弁道話を味わう)」の訳もされています。現在、私とレイトン師は、共同で「永平広録」の英訳に取り組んでおります。

今までに、道元禅師の主要な著作はだいたい英語に訳されています。しかし、日本人でさえ、道元禅師の教えや曹洞禅について深く学ぶには、道元禅師の著作を読むだけでは十分でないのは当然のことです。まして、英語訳を読むのは、現代語訳で道元禅師の著作を読むのと同じです。少なくとも、「正法眼蔵」の注釈書を合わせて読む必要があります、これ

から、道元禅師や曹洞禅を深く参究していくには、「正法眼蔵」の注釈書の翻訳も必要になってくるでしょう。そうでなければ、日本語の原典が読めるごく少数の人々にしか、道元禅師の教えがどのように曹洞宗の歴史の中で解釈され受け継がれていったか学べないことになります。私は、「正法眼蔵現成公案」の「御聞書抄」の翻訳を試みたことがありますが、それは、「正法眼蔵」の本文を訳すのと同じくらい難しい作業でした。

ともあれ、曹洞禅を日本人だけのものではなく、世界の人々に理解し、行じることが出来るものにするために、道元禅師の著作のみならず、過去や現代の多くの曹洞禅者の著作の、もっと多くの翻訳や研究が必要なことは言うまでもありません。今回の「法眼」が、将来の道元禅研究と修行の進展に向けて、人々の興味をいささかでも喚起することが出来れば幸甚に存じます。

山水経巡礼

カール・ビュルフェルト スタンフォード大学教授

今回、「法眼」誌に私の「山水経」の英訳が掲載されることは、私にとってはある意味で懐かしい場所に帰ることであり、同時に曹洞宗宗典經典翻訳事業にとっては新しい出発である。その「山水」に初めて踏み込んだのは、30年前のタサハラ禅マウンテンセンターでのことで、当時私はまだ若く愚かであった。その後、私は大学での学生生活に迷い込み、次第に年老いた愚か者になってきている。そして今私は、すべてをもう一度始めるために一回りして帰ってきたような気がする。どういふ訳か縁があって、私の人生は道元が書いたこの古い文献と結びついている。

私は1971年にこの文献を訳しはじめた。当時、私はバークレーの学生であり、サンフランシスコで鈴木俊隆老師について禅を学んでいた。その時、私は、道元についての日本語の新しい知識を試したかった。そして、鈴木老師は「山水経」を読むように指示された。一目見て、それは私にとって難しすぎると確信したが、鈴木老師はとにかくやってみなさいと言われ、手助けをしていただいた。私はタサハラ禅マウンテンセンターで、短く心地良い夏を過ごした。その間、スズカケの木の陰で本を持って座り、老師とテキストを読み返していた。その年、老師は遷化され、私は東京で勉強するためにアメリカを去った。私と「山水経」との因縁はそれで終わったと考えていた。

しかしながら数年前、スタンフォード大学の私の学生であるマーク・ゴナーマンが、ゲイリー・シュナイダーの長詩である「果てしなき山河」の研究をゼミでしようというアイデアを出した。ゲイリーが私達に詩を読んでくれるためにシェラの山中からやって来たとき、タサハラで私が訳した古い翻

訳が彼の本を書くのに大いに役に立ったという話をした。もし彼の作品全体を通してゲイリーの足跡を追跡すれば、彼の長詩の風景の向こう側に、間違いなく道元の山々が運歩しているのを観ることが出来るだろう。それで、マークは私に、翻訳を改訂し、彼のゼミで「山水経」を題材にして話をするように要請した。かくして、一つの生涯程の時がたってから、自分の出発点に帰ってきたのである。しかし今回は、より多くの参考文献がある代わりに、助けてくれる鈴木老師は居られない。

話変わって、同じころ曹洞宗宗務庁は曹洞宗宗典教典翻訳事業を始め、「正法眼蔵」全巻を翻訳しようという考えを打ち出した。どういうわけか、私は、道元が語っていることを未だ理解していないのにも関わらず、その事業と関わり合いを持つことになった。以前は、道元が語っていることが理解出来るようになるまでは、「正法眼蔵」を翻訳するべきではないと考えていた。しかし、最近私はそのようなときが来るまで、これ以上待てないこと、そして鈴木老師がおっしゃったように、とにかくただやるべきであることを悟り始めたのだった。鈴木老師は道元が言いたかったことを理解して居られたに違いないのだから、もう少しでも長生きされていたなら、私の拙い翻訳を使ってでも、人々に「山水経」を説明しようとされたかも知れないと考えたのである。他にも「正法眼蔵」を理解している人が居て、私が今の段階で出来る翻訳を使って、人々にそれを説けるかも知れないと考えた。とにかく、「正法眼蔵」のような書物では、翻訳が沢山あり過ぎて困ると言うことはあり得ない。

「正法眼蔵」にはすでにいくつかの翻訳があり、多くの翻訳が現在も続々と出版されつつある。かなり拙劣な訳もあるようだが、いくつかは本当に優れたものである。私自身の翻訳がそれらの優れた翻訳を凌駕するものになるとは思ってはいないが、これまで私が見た多くの翻訳とは少し違ったことをやってみたい。もちろん翻訳する方法は沢山あるし、どんな訳し方にもそれぞれ、長所と短所がある。著者が何を言いたいかを翻訳者が理解していない場合には、おそらく最も安全なやり方は、著者の言葉に可能な限り忠実であることであろう。どの翻訳者も訳している原本を調理しなければならぬのだが、その際の大切なコツは、読者が原語の生汁の味をいくらかでも賞味することができるようにミディアム・レア以上には焼かないようにすることである。

この場合、少なくともすべてがうまくいけばの話だが、その主な利点は翻訳者自身の考えが翻訳の中に余り入り込まないことである。主な短所は、翻訳が異国風のなじめない感覚や多数の奇妙な言い回し、そして異常な構文を伴って読みづらくなることである。時にはこの翻訳者の主観を最小限におさえる手法は原著者の文体をよりよく捉えているかもしれない。しかし文体をゆがめてしまって、原語で読む読者にとってはスムーズで流暢な文が、ねじれて、間の抜けたものになることもある。時にはそのような翻訳は、一つの文を必要以上に難解で、異様なものに見えるようにしてしまうし、原語ではまずまず分かりやすく、慣用的な表現を、奇妙で、書き手の意図に反して謎めいたものにしてしまうこともある。しかしそれはまた、原文が本当にもっている風変わりな表現を

保存し、テキスト固有の開かれた謎を保存することもできる。

すべての翻訳は取引であり、すべての翻訳家は著者と読者との間の交渉者である。しかし交渉が困難な場合には、翻訳家がしばしば道元の著作を訳するときにするように、私は、簡単な英語でパラフレーズした私自身の考えを提供するよりも、むしろ読者自身に道元の中世的な言い回しや構文の難解さと取り組んでもらおうと思う。道元は自分自身の国の言葉を楽しみ、それを自由に使いこなせる達人でもあった。彼は、独特ではあるが迫力のある、周知のように読者に理解力を要求する独自の表現方法を持っていた。彼の「正法眼蔵」の言葉は800年近く経った、現在の日本でも人々を当惑させているのだから、私達がしばらくの間当惑させられても当たり前なことではないだろうか。とにかく1000年かそこら後には、今日では優雅な翻訳だと思われるものも、おそらくテキストに忠実に固執した間の抜けた翻訳と同じくらい分かりにくい、へんてこなものと見られるだろう。

安直なパラフレーズを避け、原テキストの言葉に忠実であることの利点は、翻訳を、読者にとって原文と同じくらいに難解なものにするだけではなくて、読者が翻訳を超えて、原文の難解さに直面するのを容易にすることである。そしてこのために、私はできるだけたくさんの注釈を付けたい。それはただ仏教の専門用語や禅師の名前等についての普通の注釈だけでなく、興味深い単語と多義的な言い回し、通常の慣用句と意味のはっきりしない隠喩、語呂合わせと言葉遊びといったものについてのあらゆる種類の注釈である。翻訳が本当の意味を言い得ていなかったり、推測にすぎない場合の警告をする注釈、私が最終的に選択した解釈以外の様々な意見を示す注釈等も含まれる。例えば私は「この代名詞の先行詞は明確ではでないが、面山和尚の問解では、それはXであるといっている。」と言うような注を作りたい。

宗務庁の宗典教典翻訳事業で最も好ましいことの1つは、この脚注に対する固執を満足させてもらえることである。たとえ大学の出版部であっても、出版社は、たくさんの注釈をつけることは好まない。書物が大部で、高価なものになってしまうからである。しかし曹洞宗宗典教典翻訳事業が始まった時点で、翻訳作品を書物のかたちで出版するだけでなく、テキストについてのすべての注釈を含んだ電子様式(CD-ROM, インターネット)の作成を決めた。おそらく、殆どの人はそのような注釈に興味を持たないだろうけれども、少なくとも真剣に、「正法眼蔵」を勉強したいと希望する人のために電子様式には載せるのである。教師が講義の準備のために時折それを使用することができるだろうし、よりよい翻訳を作るためにそれを利用することも出来るであろう。

古い書物の中のたった1つの不可解な言葉を突き止めるために、半日を費やすことができるというのは、大学の学究生活の大変な贅沢の1つである。もちろん、この方法で作業をするということは、かなりゆっくりと事が運ぶことを意味する。現時点で、私達の事業は草稿の形態で「正法眼蔵」のおよそ4分の1まで到達しているが、出版するまでにまだ数年はかかるだろうと私は思う。それまでの間に、人々がこの翻訳をどう考えるか、よりよい翻訳を作るためにはどうしたらよいかについての提案をいただくために、私達の翻訳の成果の

いくつかを公表し始めることを私達は望んだ。喜ばしいことに、北アメリカ開教センターの「法眼」誌上に私達の翻訳シリーズを掲載するためのスペースを提供していただいた。ご推測のとおり、このシリーズを私の“旧友”である「山水経」から取りかかることができることを特に幸せに感じる。

「法眼」に掲載する翻訳には注釈のすべてを含めることはできない。しかし「法眼」誌上で私達の成果を公開する都度、注釈を付けてそれをインターネットでも公開することになっている。スタンフォード仏教研究所のご好意でそのサーバーの一部を曹洞宗宗典翻訳事業のウェブサイトに掲載するために使わせていただくことになった。そのサイトには、翻訳と、翻訳事業のニュースおよび私達宛のメッセージを送る為の電子メールの書式がある

<http://www.stanford.edu/group/scbs/sztp3> をご覧いただきたい。

ところでもしあなたがゲイリー・シュナイダーの愛読者でしたら、マークがスタンフォードセミナーの講義をまとめて本を作っているのはうれしいニュースでしょう。お楽しみに。私の山水経の講義とゲイリーの詩は

<http://www.stanford.edu/group/scbs/Resources/Papers/bielefeldt.snyder/bielefeldt.snyder.html> で御覧になれます。

道元・13世紀の後期実存主義者

棚橋一晃

「道元が他の思想家と最も違うのは、どういう点においてですか」サンタフェのセントジョーンズ大学での講演のとき、こういう質問を受けた。

「行為への深い信頼です」と私は答えた。「世界の巨大な問題に直面して、私たちは、個人の行為が効果をもたらす可能性を疑い、しばしば冷笑的になります。個々の行為の威力についての道元の考え方は、この冷笑的傾向に挑戦するための駆動力になるはずですよ」

40年以前、日本で私は駆け出しの芸術制作者として、精神的な指導理念を模索していた時、正法眼蔵「全機」の巻の、次のような一節に出会った。

生といふは、たとへば人のふねにのれるときのごとし。
このふねは、われ帆をつかひ、われかぢをとれり、われ
さおをさすといへども、ふねわれをのせて、ふねのほか
にわれなし。われふねにのりて、このふねをもふねなら
しむ。

この言葉に、衝撃を受けた。何と驚くべきイメージなのか。「われふねにのりて、このふねをもふねならしむ」何という積極的な洞察なのか。

当時、私は実存主義者たちから深い影響を受け、彼らの言葉から、無力さ、絶望、倦怠の響きを感じ取っていた。道元が、人生が短く、すべてが無常であるという、実存主義者たちと同じ立場から出発しているように、私には思えた。しかし道元は、彼らが行き詰まったところを突き抜け、内界および外界を変革する行為にたいする信頼に到達していた。

道元は、坐禅という単純な行為の力を信じていた。その世界観、逆説的なイメージ、複雑な言語は、先人たちから正統的に受け継いだ坐禅の用と美点を指摘することに向けられている。専門道場におけるすべての活動が、道元にとっては坐禅の延長である。共同生活を維持するための行為、たとえば料理、管理、挨拶といった一つ一つ行為の重要性を強調している。その教えによれば、規律は自由と異ならず、叡智は慈悲と不可分なものとなる。道元は、こうした精神を、専門道場を超えた世界に及ぼすことにも触れている。「菩提薩埵四摂法」に、こういう言葉がある。

忽親ひとしく利すべし、自他おなじく利するなり。もしこのころをうれば、草木風水にも利行おのれづから不退不転なる道理、まさに利行せらるるなり。

道元は、当時の日本の法律や政治組織を変えようとはしなかった。目立った環境破壊がなかった時代だったから、環境保護のための活動家ではなかった。とはいえ、道元の著作は、現代の環境危機に際して行動しようとする人達のインスピレーションとなることができると、私は信じる。彼の動ずることのない積極性が、未来のための仕事について、私たちの励ましとなる。

サンフランシスコ禅センターのメンバーと共に、20年以上にわたって、私は道元の著作の英訳をしてきた。時々、未知の人から、私たちの翻訳が、瞑想実践の役にたっていると感謝される。それによって、私たちの努力の甲斐があることを実感させられる。道元が現存して、いまなお、多くの人達を導いているのだ。

ある巻を訳すに当たって、私は普通、禅の修行が進み、英語が母国語で優れた書き手の一人と作業をする。原文の意味を模索し、それに最も適合する英語での表現を探すのは、時間と労苦を要するとはいえ、きわめて楽しい過程だ。解釈にあたっては、過去においては、宗門の主要な正法眼蔵注解書に強く依存していた。しかし現在では、道元の言葉については、道元に聞くべきだと感じている。つまり、それぞれの語句を解読するための鍵は、膨大な道元の著作のどこかに隠されているはずだ。他国語に伝達しようとする試みが、道元理解のための新しい次元の開拓を可能にする。世界に散在する翻訳者たちを、道元研究を拡げつつある、見えない共同体の参加者と想定することができる。

「行持」上巻において、道元は云っている。

諸仏諸祖の行持によりて、われらが行持見成し、われらが大道通達するなり。われらが行持によりて、諸仏の行持見成し、諸仏の大道通達するなり。われらが行持によ

りて、この道環の功德あり。

ここでもまた、個々の行為と、長い時間を通して存続する共同体との、不可分性の洞察を確認している。もし過去と現在が、このようにダイナミックに関わり合うとするなら、私たちは、過去を尊重し、過去に生きたこの師の言葉に出来るかぎり注意深く耳を傾けるべきだ。いつもながらに驚嘆すべきことには、翻訳のために道元の言葉を吟味するたびに、非常に多くのことを学ぶ。私たちは、彼よりも新しい、広範な知識をそなえているかも知れない。しかし彼の内に認められる深遠な理解に欠けている。いつまでたっても、私たちは道元のささやかな追随者なのだ。

今日、欧米人を含めて多くの人々が、道元を東洋における最大の思想家の一人とみなしている。しかし、道元を、思想家、文筆家、詩人、さらには神秘主義者、宗教家と限定することは、彼の全体像を描くことにはならない。道元はそのいっさいを含んでいる。そしてそれ以上に、彼は不思量の師なのだ。

道元は、二元的思考の領域を突き破り、身心の瞑想状態の広大さを解明した。それは、思考を超えた思考、知性を超えた意識だ。先入観念と、みずからに課する限界からの、自由の状態だ。ここにおいては、我は我を超え、小さいものは小さくなく、夢はただの夢でない。こうした非二元的覚醒に向かって開かれた意識に支えられた行為は、没我的で、ヴィジョンに導かれ、巨大な規模のものとなり得る。今日、そのような行為が、緊急に必要とされている。その行程の探究に当たって、道元が必須の源泉となるはずだ。

道元の翻訳についての感想

レイトン太源

道元を（原文もしくは穏当な翻訳において）読むのと同じように、道元を翻訳することは、十分にやりがいのある芸術である。私は進展しつつある道元の著作の英語への翻訳に貢献してこられたことを有り難く思っている。私自身の道元の学習は、私の坐禅修行と切り離せない関係にある。ニューヨークにおいて最初の師である中島貫道師より頂いた、私にとって初めての坐禅指導は、道元の教えについての法話を聞く初めての機会でもあった。どうしたわけか、深い感銘を受けた。以来約30年私は日々の坐禅修行とともに道元の勉強を継続してきた。その両者は共に歩んでいると感じた。そしてそれ以来、英語による豊富な、新しい道元の著作や研究に非常に助けられてきた。

本格的に曹洞禅の修行と道元についての話を聞き始めて1年程後、私は学校に戻り日本語、そして中国と日本の歴史、文学、哲学を学んだ。私はただ道元個人をより完全に理解し

たくて、その背景を学ぶためにそうしたのである。その後、私は学問的に、また修行の脈絡において、私の師であるアンダーソン・天真師やその他のサンフランシスコ禅センター指導者について、そして後には、日本の曹洞禅の叢林における一安居で学んだ。

道元に対する現在の興味は、大概、微妙な哲学的真実を生み出す詩的で感銘的な彼の著述の力により起こるようだ。道元は精神文学の歴史上、世界的人物となった。彼の名前は現在、ルミ、ウィリアム・ブレイク、リルケ、ツォングカバ、セイント・ジョン・オブ・ザ・クロス、ヒルデガート・オブ・ビンゲン、シャンティデーバ、マイスター・エクハルト、ニーチェ、ソロー、その他、私達のそれぞれが思いつく、そうしたたくさんの有名人と肩を並べている。しかし道元は、第一義的に、宗教的教義や文学的な洗練を重視したのではなく、むしろひたむきな瞑想の指導者として知られている。彼の焦点は、覚悟の継続、もしくは仏を超越する（仏向上）という特定の修行の伝統の維持を激励することにある。

皮肉なことに、道元の著述は、20世紀の後半に於ける西洋への禅（及び仏教一般においてさえ）の紹介に大変有意義なものとなった。日本の曹洞禅の歴史的発展における道元的重要性に関していえば、彼の著述を学ぶことに殆ど重きが置かれていなかったのである。道元から1代もしくは2代目以来数世紀のあいだ、少数の曹洞宗の学僧と僧侶を除いて、彼の著述は、1920年代に道元への興味と庶民的な復興が始まるまで基本的に知られていなかった。日本の曹洞禅の歴史的発展に即していえば、道元的重要性は、その著述よりも、第1に熱心で熟練した曹洞宗門弟の優れた中核グループを養成したこと、そして第2に、戒律を強調し、在家の菩薩戒授戒会（在家得度）を紹介したことの方にある。そのことが曹洞禅を支持する地盤を日本の各地方にまで拡大したのである。

しかしながら、道元の著述の再発見と、翻訳による西洋でのそれらの流行は、私達の現状に非常にふさわしいと思われる。道元の著述は、意味深く啓蒙的である。しばしば詩的で刺激的である一方、道元の著述はまた、現代の精神的関心に適合した展望をも提供している。道元の著述は挑戦的であり、時には慰めを与えてくれる。

彼の徹底した反二元論は、私達を取り巻いている「他者」からの疎外感、および、我々の世界と生活を巧妙に、対象化された商品に作り変えようとしている消費文化、に対するもう一つの刺激的な選択肢を提供している。道元の反人間中心主義的で包括的な世界像は、環境に対する我々の親しい結びつきと責任とを見いだすための新鮮な精神的コンテクストを供給する。

私が自身で見つけた、道元を学ぶ上で最も良い方法は、道元を翻訳しようと試みることであった。私は棚橋一晃氏や奥村正博師との共同作業で道元の翻訳を広範囲にわたって行うというすばらしい恩恵を受けた。棚橋氏とは「正法眼蔵」の数巻と道元の詩を共に翻訳し、彼の鋭敏さと道元の本質の意味を表現する詩的で優雅な手法に感謝しつつ学ばせてもらった。奥村師と共に私は「弁道話」と「永平清規」を翻訳し、私達は最近「永平広録」の訳業をすすめている。私は奥村師

の道元への注意深い忠実さ、そして道元の教えの忍耐強い研究を楽しみ、またその恩恵を受けた。私はまた様々な才能を持つ、他の優れた道元の翻訳者また学者と共に仕事をする事にも喜びを感じた。その中には、ノーマン・ワデル、ステイブン・ヘイン、カール・ビュルフェルト、トーマス・クレアリー、トム・ライト、グリフィス・フォーク等が含まれる。私は道元について、翻訳について、彼らのそれぞれからたくさんのお話を学んだ。

道元の著述の翻訳には多くの問題がある。その幾つかは、彼が使用した日本語固有のものであり、他のいくつかは彼の著述の幾つかが書かれた中国語に由来するものである。しばしば主語が明示されていない。代名詞が不明瞭である。また単数か複数かも特定されていない。時には何が述べられているのかという文脈によってこれらは明白である。しかし、しばしば翻訳者は筋が通り道理に従った英語にするために何をどれほど付け加えるか、決定をしなければならない。道元の原文の中では、往々にして一つの漢字が前後にあるどちらの句と結合するのかわかるように、どこで文章が切れるのかわかりにくいことがある。

他の主要な論点は、どのように中国語や日本語に豊富に存在する両義性を英語に含めるかということである。それらは中国語の漢字と熟語がもつ複数の意味と、道元の仏教の教えや禅の伝承、そして中国古典文学への豊富な言及のなかで生ずるのである。通常、より明確な英語で、いくつかの道元の文の中に存在するすべての付帯的な意味や微妙なニュアンスを示すことは難しい(脚注が役に立つこともあるが)。しばしば翻訳者は、文脈から道元が主に意図する意味を明確に感じることができるが、明らかに重複した意味を読みとることがふさわしい実例もある。このような場合には、時折私は原文の曖昧さと同じ広がりを見せることが出来る英語の表現を発見出来ることもある。そうしたことが道元の翻訳における小さな「勝利」なのである。

道元は経典や、公案集に由来する伝統的な語句を裏返してより深い意味を生み出すために、複雑な言葉の遊びをすることで有名である。さらに、彼の多くの文は一見、不必要に冗長で複雑であるように見えるかも知れない。

実際、時には、原文の日本語や中国語では平易で自然であるにもかかわらず、彼の日本語の構文を逐語的な英語訳で読んだ時には、くどくて子供じみたものと感じられるかもしれない。しかし、簡単にパラフレーズしてしまうのは道元の原文に対して不正を働くことになる。ノーマン・ワデルが道元の著述を京都学派の哲学者である西谷啓治氏について勉強していた時、西谷氏は一度、道元の長くて複雑な文を分解し分析して、道元が言いたかったことを表現するにはこれ以外に言い方がなかったのだと言うことを示された、と私に話したことがあった。西谷氏は、表面上入り組んで見える道元の構文は、道元が意図していた教えには、必要不可欠な物だと信じていたのである。

次の弁道話の「自受用三昧」からの2つの文は、不用意に短い文に凝縮したり、簡易化することが出来ない、道元の複雑で、正確な表現の例である。

この坐禅人(ざぜんじん)、確爾(かくじ)として身人脱落(しんじんだつらく)し、從來(じゅうらい)雑穢(ざつたい)の知見(ちけん)思量(しりやう)を截断(せつだん)して、天真(てんしん)の仏法(ぶつぽう)に証会(しょうかい)し、あまねく微塵(みじん)際(さい)そこばくの諸(しよ)仏(ぶつ)如来(にょらい)の道場(だうじやう)ごとに、仏事(ぶつじ)を助発(じよほつ)し、ひろく仏向上(ぶつこうじやう)の機(き)にかうぶらして、よく仏向上(ぶつこうじやう)の法(ぽう)を激揚(げきやう)す。このとき、十方(じふぱう)法界(ぽうがい)の土地(どち)・草木(そうもく)・牆壁(じやうへき)・瓦礫(がりやく)・みな仏事(ぶつじ)をなすをもて、そのおこすところの風水(ふうすい)のりやく利益(りやく)にあづかるともがら、みな甚妙(じんみやう)不可思議(ふかしぎ)の仏化(ぶつげ)に冥實(みやうじつ)せられて、ちかきさとりをあらはす。

道元の文を翻訳しているときの最重要な問いかけは、「ここで語られている真実はなにか? 道元は何を言おうとしているのか? 何故道元はこれを語っているのか?」と言うことである。精神的な意味を考慮することなしに、ただ単語を翻訳するだけでは十分ではない。

とりわけ難しい教えの一節と、さまざまな可能性のある意味を考慮しながら、2、3時間苦闘したあと、文章構造を再考するために道元の原文に立ち戻ったとき、突然にその意味が明確になったことが何回もあった。それから、もちろん、彼が意味することをどのように読解可能な英語に置き換えるか、道元が提供する教えを同じ感覚と語調を使って、出来るだけ正確に伝達できるか、がその次の課題である。

私は、現在行っている、継続的で協力的な翻訳活動を「道元との独参」だと考えるようになった。出会うたびに、道元は意味深い貴重なものを指し示してくれる。時には、遊び心で、言葉の意味を裏返しにする。それは理解と返答の両方に挑戦してくるのである。適切な返答をする唯一の道は、ともかくも道元の仏法を英語で鮮明に表現することである。翻訳者が持ちうる唯一つの希望は、その試みが、道元の洞察を共有しようとしている、他の人々の役に立てるかも知れないと言うことである。

私は道元の法を示す率直なスタイルを楽しむようになってきた。彼は、我々が普通に考えている論理にしたがわない。しかし、彼の心は、彼が作った結びつきの中で、覚醒の現実を表現し、現成するために、創造的に働き、遊戯する。

道元の著書である「正法眼蔵」のみならず、「永平広録」の弟子への短い上堂の中でも、道元は主要テーマや写象主義的モチーフと彼が評釈している著名な禅匠たちの会話との関係を織り込んでいる。彼は自身の教えの深く経験的な感覚と、その教えの、智恵と慈悲の表現を示すために自由に遊戯する。

私はますます、道元が、彼の弟子が捕らわれているかも知れない如何なる二元主義をも徹底的に超えてゆく仏法を、簡潔に説き、表現する遊戯性と喜びを評価するようになった。道元の教えはまたとても実践的である。彼の智恵の主眼は、私達の全ての活動を通して、この目覚めの発現を勧励することにある。「永平広録(第239)」に記録されている、修行僧への短い話の中で、道元は、どのようにこの智恵を日常活動の中で表現しなければならないかを表明している。

水にいらりて蛟龍を避けざるは、漁夫の勇なり。陸行して虎兇を避けざるは、獵夫の勇なり。白刃、前に臨んで、死を視ること

生のごときは、將軍の勇なり。且くい作麼生(いかん)がこれ納僧の勇。良久して云く、開單打眠、展鉢喫飯、鼻孔裏より気を出だし、眼睛裏より光を放つ。還た向上の事あることを知るや。飯に飽き快活、肩(あ)一錘。超過す瞿曇(くどん)の親授記。

高祖道元禪師750回大遠忌 北アメリカ開教区予修法要 無事円成謝辞

秋葉玄吾

北アメリカ開教総監

高祖道元禪師750回大遠忌北アメリカ開教区予修法要が、去る5月12日(土)、ロサンゼルス両大本山別院禪宗寺に於いて、大竹明彦宗務総長を焼香師に迎え、恭しく奉修されました。前日11日(金)には南澤道人大遠忌総監御導師のもと特為献湯諷経が厳修されました。また10日、11日の両日に渡り、北アメリカ開教センター主催により、インディアナ大学教授ジョン・マクレイ氏を講師に招き、「開教師・伝道教師研修会」も開催されました。禪宗寺主催による「晩餐会」も盛大に催されました。当日「献供出班」前には永平寺・總持寺を紹介する「禪のいぶき」と題する16ミリ映画の上映があり、ジョン・マクレイ教授の「道元禪師のご生涯～アメリカにおける曹洞禪の展開～」と題した大変有益な講義をいただきました。

日本、アメリカ各地より多くの各尊宿、特志僧が馳せ参じ、法要に随喜荷担していただきました。会場となった禪宗寺、近隣の曹禅寺、サンフランシスコ市の桑港寺など、たくさんのメンバーの方々のご参詣がありました。

正に、北アメリカ・ハワイ・ブラジル・ヨーロッパの海外4開教区を含め、日本国内9管区に於いて今年中に奉修される、その劈頭を飾る予修法要でありました。

この重要な法会実現に力を尽くされたスタッフの方々、様々なご配慮を頂きました曹洞宗宗務庁、大本山永平寺、禪宗寺メンバーの各位、法会に随喜荷担された各尊宿特志僧の各師、ご参詣ご参加いただいたたくさんの方々へ、この紙面を借り、無事円成いたしましたこと、厚く御礼を申し上げ、深湛の謝意を表します。

アメリカ・日本の曹洞禪を信奉する皆様の「報恩・感謝・祈り」の心の結集であったこの予修法要は、道元禪師が「祖師伝法の大恩、ねんごろに報謝すべし。畜類なを恩を報ず、人類いかでか恩をしらざらん……たとひ百千万代ののちも、この正法を正伝せんは、正に仏法なるべし」と述べられていることを実感いたしました次第です。

大本山永平寺では明年2002年9月16日に大遠忌国際デーを設け、海外の曹洞禪信奉者の参詣を待っています。多くの皆様の報恩拜登がいただけますよう呼びかけたいと存じます。

アメリカの曹洞禪(4)

ツーステップの法(ダルマ)

ジョン・マクレイ

インディアナ大学

我々が禪について論じる時、いく人かの開祖や祖師、伝説的な禪師たちについて語るのが常である。中国では、菩提達磨、六祖、曹山と洞山(曹洞宗の「曹洞」は2人の名前に由来する。)臨済、その他の人々である。日本なら、当然、道元や瑩山、一休そして白隠等のような偉大な人物に焦点を置くだろう。世界の文化の脈絡においても、これは全然特異な事柄ではない。どこでも人間は、歴史上の「偉大な人物」に注目するものであって、禪もその例外ではない。

このことを強調するのは、一つには、話の主要な部分に焦点を絞る、核心的要素に迫り、散漫になることを避けたいという自然の願望である。しかしながら、これは行き過ぎになることもある。例えば、通俗的な作家や翻訳家は「核心と周辺」と言うモデルを禪仏教を説明するのに使う。(時には明確に述べられている)彼らの仮定はこうである。「真の禪」とはまさに法系の本流を構成する偉大な人物たちの理解と行動のことである。一方、そのように認められなかった人々の理解と行動は単に、不合格であったとされる。時々、このような著者は周辺の人々(大部分は無名であるが必ずしもそうではない)を禪の「真の精神」の墮落、もしくは、墮落の前兆だと評する。禪の歴史は、理想化されたある種の宗教的「純粋性」を守るための、継続的な闘争であるとみなされる。「核心と周辺」のモデルはただ単に「黄金時代と衰退期」と言うモデルの一つの変種である。そのモデルによると、「十分に遠く離れた古き良き時代に起こった全ての事柄は純粋ですばらしい。しかしその後はずっと下り坂である」、ということになる。

「核心と周辺」、「黄金時代と衰退期」のモデルは宗教運動として禪の複合的な生成変化の動態を正當に扱っていない。それらは過度に単純化され、過剰な価値的判断を含んでいる。のみならず、両方のモデルは彼らが説明しようとする主題に深く影響され、衰弱させる論理上の堂々めぐりを意味している。私は、早急に複雑なことに入り込みすぎた。後の機会にもっと十分に議論するために、今はこの点を離れなければならない。

先程触れた2つのモデルのような広く解釈的な戦略でなく、禪の伝統の偉大な歴史的モデルへの焦点のみを考慮する時でさえ、物事は、「人々がどこでもする」観察によって簡単に要約されるようなことはない。確かに、人間社会の中で人々は何らかのやり方で、偉大な中心人物達に焦点を合わせるかも知れない。しかしながら、そこには、主要な歴史の筋道を支配する「偉大な人物達」に焦点を当てることをその追従者達(可能な限り広い規定で、禪として知られる宗教運動に参加する全ての人々を含める)に強要する、禪仏教のメカニズムがある。このメカニズムとは、法系である。

禪仏教では法系組織は空気それ自身のようにありふれた事柄である。どの禪師も、例えば道元や菩提達磨を通して、釈迦牟尼仏自身へとさかのぼる祖師達の長い連続した法の系譜を代表するものと規定される。そして、むしろ電気が通っている電線のむき出しの先端のように、その禪師はその法系の最終点などではなく、その活動的な中心点であり、未来へ連結する先端である。蘭の地下茎のように、法系は無限に先へ先へと成長し、必要なときにはエネルギーを統合し、しかし可能な時にはいつでも、分裂し、広がってゆく。

禪の法系組織は単に公的な知識ではない。法系は、全ての禪匠や修行者の意識に、禪の儀式の中で、定期的な読誦という方法で植え込まれる。毎朝、毎週、禪修行者とその共同体は彼らの聖なる先駆者達の名前を唱えることによって宗教的アイデンティティを明確にする。「我々は彼らに随う者である、彼らを継承する者である、彼らと肩を並べようと努める者である。我々は禪の祖師達の法系の子孫だから、禪の修行者なのである」と。

上記の「偉大な男達」についての私の言及は、赤旗のようなものであった。禪の歴史上の偉大な女性達はどうか？この数年間に、いくつかのアメリカの禪コミュニティでは伝燈歴代祖師のリストの中に、釈尊の叔母で最初の比丘尼となったマハバジャバティ（摩訶波闍波提）のような仏教の伝統の中での偉大な女性貢献者の名前を加えた。禪の系図を支配する偉大な先駆者を指す一般的用語として、「Patriarchs（父権制社会の長で、男性に限られる）」よりもむしろ、「Ancestors（性別に関係なく先祖）」という言葉を使用することにも、男女同権主義者の感性が関係している。私はこの用語の変化を、我々の伝統の変革に於ける1つの小さな前進として称賛する。これは、一面では禪の自然の継続的な発展であり、また、一面では東アジアの外での成長を示すものである。

しかし、中国、韓国、日本、ベトナムなどの東アジアの伝統的社会に於ける禪の記述としては、禪の法系の表看板を「Patriarchs」ではなく「Ancestors」と呼ぶことは見当はずれであろう。男女同権主義者が使う意味での、父権制社会組織を前提とすることは、禪が発達した社会と禪それ自身にとって根本的に重要である。我々が過去について研究するとき、常に、我々の先入観と偏見を自覚するように努力しなければならない。我々が大学の歴史の教授から聞いたこととは違うかも知れないが、我々は、過去の出来事について価値判断をする全ての権利を持っている。我々は単に、フィードバック・ループ（出力としての行動の一部を、目標に向かうように修正するために入力側に戻す輪）に捕らわれているとき、そのことを自覚するべきである。そのループの中では、我々の先入観と偏見が、歴史の中で実際に何が起こったかについての我々の分析に影響を及ぼし、そして、我々の先入観を補強することになっているのである。

私が言いたいのは、禪の法系組織が、我々が禪の伝統に近づく型板をなし、禪の伝統を理解するレンズになっていると言うことである。型板やレンズとして、それは、必ずしも主題の一部ではない、一定の形、または色を添える。

父権的継承を抜きにして、禪を考察することさえ、無意味にみえる。いつも、私は大学の教室でも、禪センターの週末セミナーでも、学術的出版物の中でも、禪は、系譜の伝承が根本的に、その歴史的自己概念とその宗教的実践のスタイルを規定すると言う意味で、根本的に“系譜的”である、と論じている。実際（私が上記したように）、法系組織は、空気それ自体と同じくらい一般的だ；それらは禪が泳いでいる水そのものでもある、と言うだけでは十分ではない。ここで大切なのは、法系を離れて禪がどうなるかを見るのではなく、法系が我々の禪の理解にどのように影響するかを理解することである。禪の法系のモデルは、偉大な男性の指導者の継承に専念することを我々に説き勧めている。つまり、禪の法系のモデルは、通常の間が偉大な男性指導者に焦点を当てる為に、宗教的そして知的正当化を提供する概念構造である。

これはもちろん、禪の法系のモデルについて我々が出来る多くの観察の一つにすぎない。私が今行っているいくつかの歴史的な調査は、伝統的な中国禪仏教の中の禪法系のモデルを探求することに向けられている。現在の脈絡に於いて、私は、これらの禪の法系についての最初の観察それ自体をアメリカに於ける禪についてのいくつかの論評への踏み石として使用したい。

つまり、禪仏教に於ける「偉大な男達」の強調のいくつかの理由を手短に述べ終わったところで、私は考える。現代アメリカの曹洞禪の「偉大な男達」でない人達はどうかと。もっとはっきりいえば、現代アメリカの曹洞禪の偉大な指導者でない人々によって演じられる役割は何なのだろうか？

その疑問は本当に明らかであるべきである。関わりを持っているすべての人を考慮に入れることなしに、我々はどうやってアメリカの禪について考えることが可能であろうか？もし我々がアメリカの禪を認知された指導者だけから成るものと想像したとして、何を得るだろうか？それは、とても小さい何人かの個人の集まりにすぎない。一つの空の貝殻である。

アメリカに於ける曹洞禪の研究の準備のために、あちこちの禪センターを訪れる時に、私はしばしば冗談交じりで言った。「主に関心があるのは修行者ですけど、“譲歩して”指導者とも話をしてもいいですよ」と。結局、指導者はなんといっても、いつでも話をして、弟子達に物事を説き、物事がどのようになされるべきかを指し示す人達である。指導者の法話は記録され出版され、その著書は販売される。

これに反して、弟子達は禪に関わっている間、話すよりも、聞く方にはるかに多くの時間を費やす。だから、彼らの禪修行の取り組み方について尋ねるために、テープレコーダーをもって来たとき、修行者達は“いつでも”しきりに話したがった。とにかくそこにはいつでも、インタビューを受けたがる修行者がいる。基本的に、私がしなければならないのは、テープレコーダーのスイッチを入れ、「さて、」と言うことだけである。45分か1時間後には、1人の人の禪仏教との出会いについて明確な叙述を得るのである。

こうしたあらん限りの訪問とインタビューをしているうちに、多くの禪センターが提供する行事にも、その参加者にも明白に、自然な区分があることに気がついた。第一群の修行

者たちは、フルタイムで、自身の探求に打ち込んでいる。おそらくセンターに居住しているか、もしくは、特定のセンターの修行活動に定期的にしばしば参禅する人達である。運営上の労働量に関していえば、この「第一群」の修行者は、殆どの労働力とリーダーシップの供給源である。

私はまだ確かな一般化をすることはできないのだが、そして、その状況はおそらく場所によって大きく違うであろうが、指導者の注意と精力の大部分は、この第一群の修行者達に向けられていると言うのも確かであろう。伝統的な法系組織のモデルからいえば、この第一群の修行者達は、禅の法系の中に組み込まれるべき人々の候補者の供給源である。

第二群の修行者の集団は、禅センターと何らかの在り方で関わりを持って生活している、広範囲の個人、夫婦、家族、そしてグループから成り立っている。ある視点から言えば、この第二群の修行者は、ただ単に、第一群には入らないと言うことによって規定される。しかし、この第二群を、あまり献身していない人々として無視することは間違いである。人間の組織として、どんな禅のコミュニティーもこの第二群の人々からの援助と参加ぬきでは、生き残ることは出来ない。これは道徳的価値判断ではない。私が言わんとしていることは、あまり献身していない参加者との健全な関係を持っていない禅のコミュニティーは堅固な組織的な基盤を持たないし、それ故におそらく姿を消していくだろうと言うことである。それと対比して、あまり献身しない参加者の宗教的要求に対して、十分にまた創造的に対応している禅のコミュニティーは、組織として生き残る確率が高い。

禅センターAと禅センターBと私が呼ぶ、2つの異なる禅のコミュニティーについて説明させていただきたい。これらの両方は具体的な施設であり、合成したイメージではない。禅センターAは長時間の「只管打坐」を強調し、宗教儀式を著しく遠ざける曹洞禅のなかの一つの伝統から派生した。人里から車で数時間も離れた、美しい山の中にある禅センターAは、厳しい坐禅のスケジュールを継続しているが、それ以外のグループ活動は何一つしていない。その特定のスタイルの禅を修行したい人は、もしそれが正しいなら、そしてそれがふさわしい時に、この場所を見つけるだろうと言う、理想主義的な立場に基づいて、禅センターAは、積極的に参加者を引きつける活動は一切していない。その常住の指導者はその地域の大学やグループで、ある程度の講義を行っている。しかし彼はそれらの接触を、彼のセンターをサポートするためのネットワークとして積極的に育てようとはしない。そしていくつかのとても効果的な方法で、このセンターは人々が共同体としてのアイデンティティの感覚を創り出すことを思いとどまらせている。

そのセンターは、メイリング・リストを管理していない。ましてや、寄付金集めや、行事の案内の郵便物を発送することはない。何故なら、通常の坐禅のスケジュールの他には何もないからである。摂心中にさえ、参禅者は自身の食べ物を持って来ることを要求される。そしてゲストと一緒に来た参禅者は、時にははっきりと拒絶されることがある。修行は明確に厳格さを好み、自分自身がやる気を持って修行すること

が無言のうちに強調されながら、継続してゆく。

禅センターBもまた主要な居住地の中心から2～3時間離れた美しい山の中に位置し、ここでもまた活発な修行が行われている。しかし類似しているのはここまでだけである。まず第一に、フルタイムで完全に献身的な修行者達のための規定は、組織的に考案されている。このセンターは、大規模な修行のシステムを持っていて、1つのレベルからもう1つ上のレベルへ移行するためには、教師とコミュニティーの指導者からなる委員会に公式的な申請を提出しなければならない。第二に、アメリカ禅の週末の勇士達のために多彩な行事が提供されている。禅センターBは積極的に、その芸術・書道・自然環境・写真撮影・多数の主題を持つ研修会の宣伝広告をしている。私は2～3カ月ごとにそのすべすべしたカタログを郵便箱に受け取るのである。禅センターBの創立者の教えは、カセット、CD、ビデオ、あるいは本として入手可能であり、そのうちの幾つかは普通の大きな書店で見つけることが出来る。創立者の最初の後継者達は現在、彼ら自身のセンターを創出し始めており、リビングルームでの坐禅のグループや各地域のコミュニティーが禅センターBとともに、その核として成長しつつある。

どちらのセンターが「真の禅」を代表しているのだろうか？私はこの様な判断をしたいとは思わない。禅センターAは禅の施設のある形を継続しており、現代のアメリカの環境に適合させている。しかし、それは東アジアの深い根源を持っている。その真面目一方の修行の哲学と、とりわけ只管打坐の果てしない努力への献身を考えれば、誰が、そのやり方に何か「間違い」があると言うことができるだろうか？

とはいえ、どちらのセンターが組織として生き残る見込みがあるかと尋ねるとき、その答えは明白である。どちらのセンターがより多く、人々の生活に影響を与えるだろうか？どちらのセンターが狂気を帯びた現代社会を癒すのに寄与するだろうか？ここでもその答えは明確である。

この夏、私は南カリフォルニアの禅マウンテンセンターに2回に分けて訪問した（ついでながら、ここは禅センターAでもBでもない）。最初の訪問は、ちょうど日曜日の朝に立ち寄ったのだった。天心・フレッチャー師から最近のワイルダネス（野生）リトルルートで使った革新的な瞑想技術の簡潔な説明を受けた。私はいつか後の機会まで、その詳細の全てにわたって説明するつもりはないが、その中には、色々なやり方で、積極的に、誤った考えを処理することが含まれる。例えば、その技術の1つは、ただ、心に浮かんだあらゆる考えを声に出して言うことであつた。リトルルートに参加した人達は、互いに呼んでも聞こえない隔離された場所へ行き、浮かんでくる全ての思いを言葉に表す。私はいつも禅修行者が使用する、変化に富んだ特殊な修行に驚かされてきたが、これは私には未知のものであつた。

私が夏に再び訪れ、居住している修行者数人にインタビューしたとき、私は誰もこれらの革新的技術の名をあげないことに少し驚いた。修行者はすべての広く知られている修行一呼吸への意識集中、只管打坐、公案参究一を引き合いに出したが、誰一人として、私が数週間前に聞いた珍しい4つの技

術の実践について触れなかった。私は少数のインタビューし
かしかつたので、偶然に彼らの言及を聞き逃したのかも知
れなかった。しかし、そうではなかったことが分かった。

私が天心師にその技法について再び尋ねたとき、彼は先述
の技法はワイルダーネス（野生）・リトリートのために使わ
れたものであって、それらは住み込みの修行者の通常の修行
履修課程の一部ではないことを説明したのである。それらは
特に、上記したような「第二群」の修行者のために考案され
たものである。だから、「第一群」の修行者はだれも私にそれ
らについて話さなかったのである。

この点で、私は禅マウンテンセンターは禅センターAより
も、禅センターBに近いと感じた。少なくとも、週末の研修会
参加者達のために質的に異なった宗教的行法を供給する、天
心師の決定は、社会的組織の観点から見れば、洞察力があり、
称賛に値することである。「核心」を選び取って、「周辺」を
無視するより、むしろ異なった人達のために、顕著に異な
ったタイプの指導法を供給することは、教団としての、より洗
練された機能である。「ツーステップの法（ダルマ）」（私はそ
う呼びたい）は、ある種の理想化された宗教的規準からみれ
ば、必ずしも“より良い”ものではないかも知れない。しか
しそれは、多数の人々に、仏教の修行の利益を広める方法と
しては、より効果的であることは確かである。異なった層の
禅の「お客さん」達に注意を払うことは、組織の設計として
良い戦略である。なぜなら、彼らの状況に応じてそれにふさ
わしいやり方で人々を助けると言うことがそこには含まれる
からである。

私の『坐禅参究帖』（八）

打坐をめぐる断想集

藤田一照

バイオニア・ヴァレー禅堂

《断想 18》全一の坐禅（1）その一

一 坐相の全一性

普通、坐禅のやりかたを説明するときには、いわゆる「調
身・調息・調心」という順でおこなうことが一般的である。
すなわち、まず身相を整えることから指導をはじめ、脚、上
体、手、口、目など体の各部分の処置の仕方を、順を追って
ひとつひとつ教える。次に、息の仕方について説明があり、
それから心の処置の仕方についての指示がなされる、という
具合である。坐禅の実際を具体的に言葉で説明するためには、
こうして体の各部分、息、心というふうに坐禅を解剖・分解
して、それらのある順序で記述していくしか他はない。

もちろん、坐禅の実物をみせて「この通りにやりなさい。」
とだけ言う、言葉に頼らない方法も考えられるが、それだけ
では初心者に対しての、充分有効な坐禅指導法とはなりえな

いと思われる。そのやり方では、坐相の微妙なところは伝わ
りにくいし、坐禅における心理状態に関する事などは、外
からうかがい知ることが不可能に近いからだ。それにその実
物に見よう見まねで近づこうとすれば、大抵の場合、坐相の
それぞれの部分に注目して、「脚はこう、手はこう・・・」と
いう具合に部分ごとにまねていこうとするだろうから、結局、
諸部分のある順序で組み立てて坐禅にしていくというやりか
たにならざるを得ず、その点では、最初の一般的方法と大差
ないことになる。

したがって、坐禅を教えたり、習ったりする時には、坐禅
の全体を一挙に、という訳にはいかず、便宜上どうしても坐
禅の全体をいったん切りきざんで部分に分け、それらを時系
列的な順序に並べる作業をせざるを得ないということになる。
また、実際に坐禅を行う場合にも、「衲子の坐禅は、直にすべ
からく端正坐をさきとし、しかるのちに調息、致心すべし」
（『永平広録』）、つまり調身→調息→調心という一定の手順を
ふんで、だんだんと坐禅の身心を構成していくのだ。

しかし、こうした準備段階（すでにこの段階も坐禅の営み
の重要な一部というべきなのだが・・・）を経て、坐禅が坐禅
になった時には（正身端坐が現成している時）、空間的・時間
的にバラバラに分解された形で与えられたそれぞれの指示が、
坐禅している当人の身心において、一つに統合された全体
（空間的統一）として、一挙に（時間的統一）実現されてい
なくてはならない。調身・調息・調心が不可分一体となった、
まるごと「全」体が「一」つの坐禅になっていなくてはなら
ないのだ。つまり「全一」の坐禅である。「打坐（たざ）」と
いう言葉は、坐禅におけるこのような空間的・時間的全一を
強調した表現のように思われる。

ここで、坐禅の姿勢、つまり「坐相」・「調身」の側面
において、坐禅の全一性がどのように顕現しているかに注目し
てみよう。全一なる坐禅を行ずる者の体感の中では、脚は脚
のありかた、手は手のありかた、目は目のありかたという風
に、体のあちこちの部分がそれぞれ無関係のまま、雑居的に
存在しているのではない。坐禅している当人は、調身に関す
るあれこれの指示に従って、あれこれのことを体のあちこち
でやっているのではない。正身端坐というたった一つの身構
えをまるごと全身でねらっているのみなのだ。だから、あく
までも一つの単純渾一な坐禅の姿勢がそこにあるのみで、そ
の中にある結跏趺坐、法界定印、半眼などの各部の姿形はそ
の全一的姿勢の局部的顕現として感じられるのだ。各部分が
それぞれ個性的な働きをしていながら、全身としては「一如」
の状態に統一されている。体の各部分の境界・仕切りが消
えて、すべてが一つの「全身筋合い」（全身の筋肉・骨組の構
え）のなかに包摂され、渾然一体となってそこに溶け込んで
いるといった感触をもつのだ。（坐禅中に自分の手や脚が「消
えたり、無くなった」ような感じを持った人は多いと思う。）

人間の生きている身体は部分の単なる寄せ集めではなく、
一つの有機的統一体なのである。そして、体の一か所を動か
すと、それがどんなに微妙な運動であっても、体全体がそれ
につられて動くようにできている。「操体法」の創始者であ
る故橋本敬三氏はこれを「同時相関・連動の法則」と名付け

ている。

たとえば、足の親指だけを動かしてみれば、その親指だけが動いているように見える。ところが、この親指を握って固定した状態にしておいて、無理矢理にこの親指を動かそうとすると、足関節、膝関節、股関節、仙腸関節、骨盤、脊柱、頸椎、頭蓋にまで力が入って動きだし、さらに顔面の表情筋や上肢の各関節、指先にいたるまで、全身が相関して動くようになる。だから、実は一関節の動きといえども、その動きは隣接関節に連鎖的運動を引き起し、全身に波及していくものなのである。

だから、人間の生きた体はもともと全一的なものなのである。このように精妙な「運動装置」ともいえる身体でもって、「正身端坐」の形をつくり、それを保持するよう努めることが坐禅なのであるから、それがどのくらい微妙で奥の深いことであるか、また困難なことであるかをあらためて思い知るべきだ。例えば、「張らず、細めずという目つきで、眼を常に開くべし」という「坐禅中の目つき」に関する指示がある。これは、一見とても些細なことのように思えるが、それを本当に正しく実現しようとするれば、それは、眼という身体の一部の処置だけではすまず、究極的には、実は全身（心も含めて）のありかたの問題になっているということに思いたるべきなのだ。(続く)

北アメリカ開教総監部・開教センターニュース

◎高祖道元禪師750回大遠忌北アメリカ開教総監部予修法要が5月12日にロサンゼルス禪宗寺で行われ、多くの参拝者が訪れました。

◎北アメリカ開教センター職員が、以下の通り高祖道元禪師750回大遠忌予修法要に随喜しました。

5月20日、布哇別院正法寺で南原一貴北アメリカ開教センター書記がハワイ予修法要に随喜

6月10日、ブラジル仏心寺で宮前憲生北アメリカ開教センター書記が南アメリカ予修法要に随喜

6月16、17日、フランス禅道尼苑で横山泰賢北アメリカ開教センター書記がヨーロッパ予修法要に随喜

◎7月9日から21日までカリフォルニア州にあるグリーンガルチファーム（蒼龍寺）とサンフランシスコ禅センター（発心寺）において、多々良学園高等学校語学研修が今回初めて行われました。16名の生徒と3名の引率教員が両禅センターで参禅すると共に英会話クラスを行いました。

◎曹洞宗宗制に関する説明会が、8月23・24日にミネソタ州のミネソタ禅メディテーションセンター・願生寺で、27・28日にニューヨーク州の禅マウンテンモナストリー・道真寺において行われました。

北アメリカ開教センター活動予定

2001年10月～2002年3月

宗典講読会

日時： 2001年10月14日、11月18日、12月9日（午後2時より講義のみ）、2002年1月13日、2月17日、3月31日の各日曜日
午前 8時30分 坐禅
9時10分 朝課
9時30分 作務
10時 奥村正博開教センター所長による講義

会場： カリフォルニア州サンフランシスコ桑港寺

内容： 正法眼蔵（仏性の巻）

仏教講演会

日時： 2001年10月7日、11月4日、12月9日、2002年1月6日、2月10日、3月5日の各日曜日
午前10時加藤和光北アメリカ開教師による講義

会場： カリフォルニア州ロスアンゼルス禪宗寺

内容： 10月7日 般若の思想を反省する時期

11月4日 仏自身の問い

12月9日 業について

1月6日 禅と沈黙

2月10日 禅の修行とは何か？

3月5日 彼岸法要

摂心

北アメリカ開教センター摂心

日時： 2001年10月19～26日

場所： タサハラ禅マウンテンセンター

眼蔵会

日時： 2002年3月8～15日

場所： サンフランシスコ禅センター